



不登校の子どもに選択肢を

2018年1月末現在で、上尾市内では小学生で38名、中学生で158名の不登校の状態にある子どもたちがおり、昨年度よりも増加しています。不登校の問題は上尾市でも深刻です。

この問題について昨年3月に文科省が出した通知では、民間の団体との連携に向けた推進し、学校以外の場での学習の支援をより充実することを指示しています。それは、不登校の子どもたちに選択肢が必要だからです。

問題への対応として一般的なのが適応指導教室ですが、上尾市でこの教室に入級している子どもは不登校児童生徒全体のうち小学生で6%、中学生で4%と、居場所を十分に用意できているとは言えません。

その要因の一つに、教室で指導にあたるのが教職経験者であることがあると考えています。いくつかの調査を見ると、不登校の理由に「先生との関係」というものが一定の割合を占めています。不登校の子どもへの支援をしているシュール大学の朝倉さんはこれを「学校のおい」という言葉で表現しています。

その対策としてはフリースクールとの連携や不登校特例校の設置により選択肢を増やすことが不可欠です。その第一歩として私が提案しているのがスクールソーシャルワーカーの活用です。現在上尾市には4名のスクールソーシャルワーカーがいますが、半数は教職経験者以外が担当しており多様性があります。深刻化する不登校問題に対応するため、さらなる増員を求めています。



シュール大学の朝倉景樹さんと意見交換



キーワード

適応指導教室

教育委員会が不登校の小中学生を対象に運営する教室。上尾市では教育センターに設置されている。適応指導教室への出席は一定の条件の下で出席日数としてカウントされるなど、学校復帰を念頭に置いた運営が行われる。教員、もしくは元教員が担当者となる。



データでみる

不登校の子どもの選択肢

上尾市の適応指導教室の入級児童生徒、教育センターを定期利用する児童生徒の不登校全体に占める割合

	小学生	中学生
適応指導教室 入級児童生徒	6%	4%
教育センター 定期利用児童生徒	26%	16%



Point

スクールソーシャルワーカーの活動

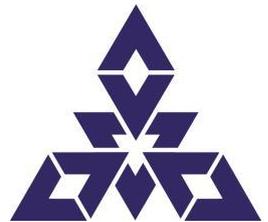
スクールソーシャルワーカーとは、子どもの家庭環境による問題に対処するために活動する専門職で、上尾市では学校の要請に応じて、家庭訪問をして児童生徒・保護者と面談したり、学校や関係機関との連携を図るネットワークづくりを支援したりするなど、児童生徒の置かれている様々な環境への働きかけを行っています。

文科省が推進する「チームとしての学校」のなかでも配置の拡充、資質の確保の必要性が述べられており、積極的な配置が社会的に求められています。

活用の先進事例

福岡市

2018年度よりスクールソーシャルワーカーを全中学校区に1人ずつ配置。全国最多の69名で不登校などの問題にあたる。勤務は週4日で担当する小中学校を定期的に巡回する。



名古屋市

いじめや不登校の子どもの問題に学校に常勤のスクールソーシャルワーカーが対応。スクールカウンセラーなどの他の専門職のスタッフとともに「なごや子ども応援委員会」として活動。



活動報告



2018年4月30日 荒川の自然を守る会総会

荒川の自然を守る会の総会に出席しました。市民活動は行政の支援があればより力強く活動を推進することができます。自然環境を守り、上尾の魅力を高めるために市として連携できる部分はどこであるのかを探り、サポートを求めています。

●皆さまのご意見を聞かせてください●



メール
ebihara116@gmail.com



フェイスブック
<https://www.facebook.com/ebihara.naoya12/>

■えびはら直矢プロフィール■

昭和62年12月3日生まれ。

●上智大学法学部卒

●首都大学東京社会人類学教室修了。

国連UNHCR協会職員などを経て、大島敦衆議院議員公設第一秘書を務める。

大学在学中に市民団体を設立し、現在子どもたちの放課後を考える団体や演劇教育を推進する団体など4つの団体の運営に携わっている。2017年上尾市議会議員に当選。
家族：妻、長男（2才）、長女（1才）